

長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡(5次調査)広報発表資料

(公財)京都市埋蔵文化財研究所
2026年8月27日(木)

所在地:京都市伏見区淀水垂町地先
調査期間:2025年10月16日～2026年5月29日
調査面積:約8,200㎡(7区:約1,900㎡、9区:約1,700㎡、10区:約4,600㎡)
調査対象面積:約23,000㎡

1. はじめに

本調査は国土交通省淀川河川事務所が淀川水系河川整備計画に基づき、桂川の洪水時における治水安全度を向上させるための河積拡大(掘削工事)に伴うものです。調査は数か年に分けて実施する計画で、令和3年度の調査開始以来、5次にわたる発掘調査を実施しています。今回は、これまでに実施した1～4次調査の成果もふまえて報告します。

調査地は伏見区淀水垂町地内に所在しており、長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡に該当します。調査区は桂川右岸の河川敷に位置しますが、これまでの調査成果から、現在の桂川河道が江戸時代の始め頃に付け替えられたものであり、それ以前の河道は調査地から離れた場所にあったと考えられています(図1～3)。

調査地がある淀には、古代から中世にかけて平安京・京都の外港かつ淀川水運の拠点として栄えた「淀津」がありました。淀津は港湾施設や倉庫・市場のほか、室町時代の史料に「千間(軒)在所」と記されたように、多くの建物が軒を連ねる都市的な場であったと考えられています。また、経済・交通の要衝である淀はしばしば係争の地となり、史料によると室町時代には城が築かれていました(表1)。しかし、現存する江戸時代の淀城よりも前にあった、豊臣秀吉が秀長に命じて普請した淀古城や、それ以前の中世淀城の所在地や構造などの実態については、よくわかっていません。

今回報告する室町時代後期の大規模な堀で囲まれた方形区画群は、規模や出土遺物などから、一部は史料に見える中世淀城の一面にあたると考えられます。

2. 調査成果

堀で囲まれた方形区画群と、柱穴などの遺構や道路などを検出しました。これらは発掘調査地全域に相当する南北約260m、東西約80mの範囲に及び、さらに江戸時代に現在の位置に付け替えられた桂川河道の範囲にまで広がると想定しています。方形区画群は、堀の主軸方位や形状から北区画群と南区画群に区分できます(図4)。両区画群の堀は、室町時代後期にあたる16世紀初頭頃には成立しており、安土桃山時代まで複数回にわたって掘り直されて利用されていたことが、出土遺物の時期から明らかになりました。

(1)北区画群

3・4・6・7・9区で確認した主軸方位が正方位をとる堀(溝4047・6130・6225・7111・7212・7240・7228)に囲まれた区画群です(図4)。幅3.9～5.3m、深さ2.1～2.7mの規模をもつ断面V字状の堀(薬研堀)によって区画されており、一部では土塁の痕跡も確認されています(図5)。また、溝7212と溝7240の間にある空閑地と、溝6130と溝6225の間にある空閑地は、それぞれ東西方向の道路(道路1・2)として利用されたと考えられます。なお、溝4030・7112・7224については安土桃山時代に新たに掘削されたものです。堀の埋土からは、輸入陶磁器を含む土器類や瓦類、卒塔婆などが出土しました。

道路1・2と堀(溝7111・7240・6130)に囲まれた区画Aは、南北長約100m、堀の深さ約2.7mと、調査地内で最大規模となる区画です。柱穴などの遺構が溝7111の東側に集中していることから、桂川の河道付け替えによって削り取られた区画東側にも遺構が存在したと考えられます。

(2)南区画群

2・3・5区で確認した主軸方位が斜行する堀(堀2123・2299・2350、溝2646・5025・5027・5050・5057)に囲まれた区画群です(図4)。幅4.2～5.9m、深さ2.0～2.3mの規模をもつ断面逆台形の堀(箱堀)によって区画されています(図5)。堀2123と溝2646の間にある空閑地は、東西方向の道路(道路3)として利用されたと考えられます。堀の埋土からは、輸入陶磁器を含む土器類や瓦類、瓦質の照明器具である瓦灯、卒塔婆などが出土しました。なお、堀2299・2123の成立時期は、出土遺物から他の堀よりも古くなる可能性があります。

3. まとめ

室町時代後期の方形区画群を、発掘調査地全域にあたる南北約260m、東西約80mの範囲で確認しました。それぞれの区

画は幅約4～6m、深さ2m以上の堀で囲まれており、その内側には寺院や城などの存在が想定できます。また、堀の主軸方位や断面形などから北区画群と南区画群に区分できること、さらに、北区画群には南北約100mの大規模な区画Aがあり、それを囲む薬研堀についても、他区画の堀よりも深いことが明らかになりました。

調査地がある桂川右岸域の乙訓・西岡には、中世の土豪らが構えた城館群が点在します。中井均氏や福島克彦氏らの研究によると、それらは70m規模の方形館を基本とすることが指摘されています(中井2023、福島2005)。今回確認された北区画群の南北約100mの区画Aは、これら乙訓・西岡における一般的な城館群の規模を凌駕するものです(図7)。

また、これまでに京都市内や(馬瀬2015・2018)、乙訓・西岡の調査で確認されている堀や溝と、今回の調査で確認した堀の規模とを比較すると、前者の大半が幅4m未満、深さ1.5m未満の範囲に集中するのに対して、淀水垂大下津町遺跡の堀は相対的に大きいことがわかりました(図8)。さらに、区画Aを囲む薬研堀は、南区画群の箱堀と比べて深く、防御性に優れた形状であることが指摘できます。

このように、今回確認された方形区画群は、遺構の時期から中世の淀に関係することは明らかです。そして、方形区画群の中で最大規模を誇る区画Aは、周囲を囲む堀に備わる高い防御性から判断すると、城の一面にあたる可能性が高いと考えられます。中世淀城は、守護代や細川管領家当主の細川氏綱、三好三人衆の岩成友通が居城した歴史をもち、一般的な土豪の城とは質が異なります。今回の成果は、中世淀が政治・軍事における要衝であったことを裏付けるものと考えられます。

参考文献

馬瀬 智光 「室町から戦国時代の様相―洛中の堀を中心に―」『京都府中世城館跡調査報告書』第4冊(山城編2)、京都府教育委員会、2015年

馬瀬 智光 「洛外における堀の変遷」『京都市文化財保護課研究紀要』創刊号、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、2018年

中井 均 「物集女城跡の歴史的意義」『物集女城跡総合調査報告書』向日市埋蔵文化財調査報告書第125集、向日市教育委員会・(公財)向日市埋蔵文化財センター、2023年

福島 克彦 「乙訓・西岡の城館と集落」『京都 乙訓・西岡の戦国時代と物集女城』、文理閣、2005年

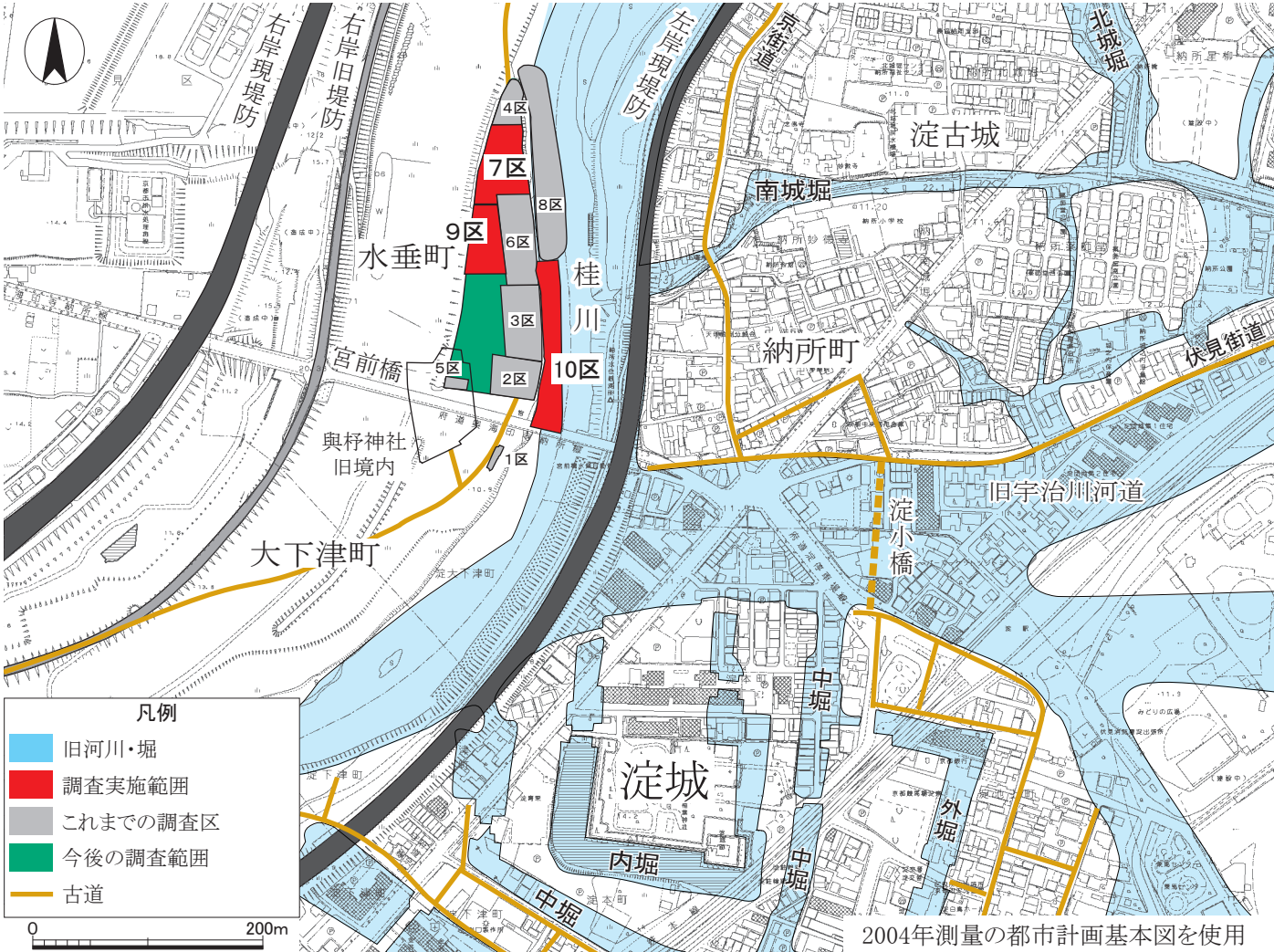


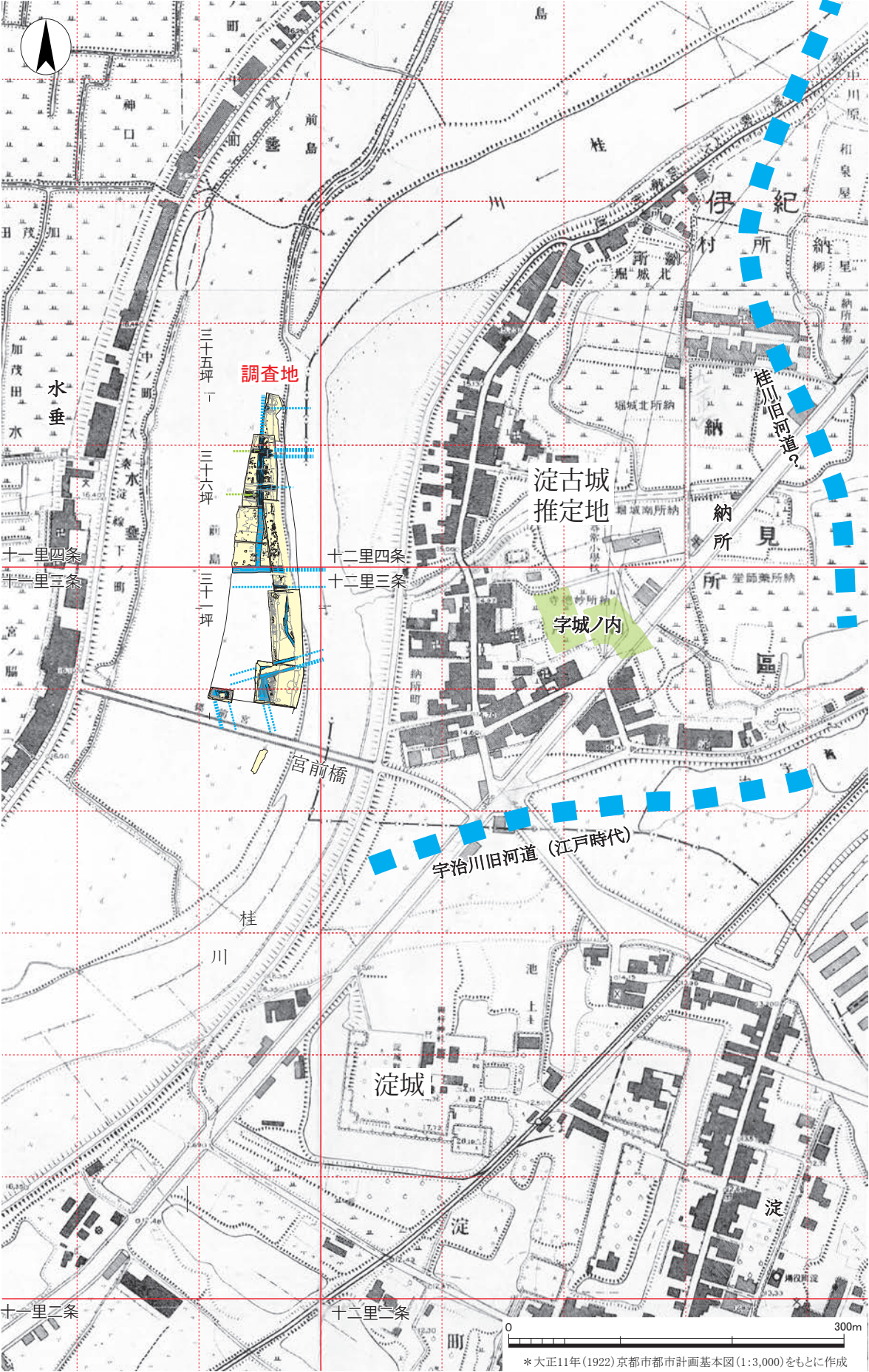
図1 調査地位置図(1:6,000)



図2 調査地位置図(1:8,000)

表1 淀周辺関連年表

延暦23年	804	桓武天皇が淀津へ行幸する。(『日本後紀』)
大同5年	810	菓子の変の際に、「与度市津」に兵が置かれる。(『日本紀略』)
寛弘6年	1009	この頃から「東西淀」という表現が使われはじめる。(『御堂関白記』)
承久3年	1221	承久の乱の際に、坊門忠信が淀に陣を置く。(『吾妻鏡』ほか)
寛元年間	1243～47	淀納所と中島が淀小橋で結ばれる。(『山城淀下津町記録』)
明德2年	1391	山名氏清方の軍勢が京に攻め上る際に淀ノ中島を通過する。(『明德記』)
応永25年	1418	山城守護一色義貫の家臣三方範忠が守護代に任じられ、淀の美豆に城郭を構える。(『看聞日記』)
文明2年	1470	細川勝元・東軍方の西岡・中脈地頭御家人衆が淀下津を攻め落とす。(『野田泰忠軍忠状』)
文明10年	1478	管領畠山政長が、守護代として神保与三左衛門を淀に入部させる。(『東院年中行事記』ほか)
文明12年	1480	この頃には納所に「よと口の関」と呼ばれる関が置かれる。(『山科家礼記』)
延徳2年	1490	興福寺大乘院の尋尊が「淀・皆以八幡領也、千間(軒)在所也云々」と記す。(『大乘院寺社雑事記』)
永正元年	1504	細川政元に対して薬師寺元一が挙兵し、淀の城(淀藤岡城)に籠もるが落城。(『細川両家記』ほか)
大永7年	1527	細川晴元方の赤沢新兵衛らが淀に攻め入り、小島五郎次郎が城を抑える。(『大永七年雑記』)
永禄元年	1558	細川管領家当主の細川氏綱が淀小島城にて連歌会(細川千句)を催す。(永禄6年にも実施)(『言継卿記』)
永禄2年	1559	細川氏綱が淀の城に入城する。(『細川両家記』)
永禄9年	1566	松永久秀方の守護代多羅尾綱知が淀の城から退き、三好長逸内衆金子某が入城。(『細川両家記』)
永禄11年	1568	織田信長方の軍勢が、西岡・吉祥院・淀・鳥羽・樟葉などを焼き討ちする。(『言継卿記』)
元亀4年	1573	足利義昭方の岩成友通らが淀の城に籠城するが、細川藤孝に敗れ逃亡。(『細川両家記』ほか)
天正10年	1582	本能寺の変後、明智光秀が羽柴秀吉と戦うための拠点として淀の城を改修する。(『兼見卿記』)
天正16年	1588	豊臣秀吉の命により、秀長が淀の城(淀古城)の修築を行う。翌天正17年に完成。(『多聞院日記』)
天正17年	1589	豊臣秀吉側室の茶々(淀殿)が淀ノ御内で鶴松を出産する。(『北野日記』ほか)
文禄3年	1594	淀古城の天守と矢倉が破却される。(『駒井日記』)
元和9年	1623	松平定綱が淀城の築城を開始する。(寛永3年(1626)完成)(『徳川実記』)
寛永14年	1637	永井尚政が木津川の河道付け替えを行い、城下町を拡張する。(『淀下津町記録』)
明治元～3年	1868～70	洪水後の災害復旧で京都府・淀藩合同で木津川の河道付け替えが行われる。
明治29～33年	1896～1900	淀川改良工事により桂川が拡幅され、水垂・大下津町の集落が移転する。



* 桂川旧河道の推定位置は、国土交通省国土政策局『人工地形及び自然地形分類図 京都南部(5万分の1)、2014 年から復元した。
* 納所「字城ノ内」の位置は、今谷昭「中世淀付近」『淀の歴史と文化』西川幸治編、淀観光協会、1994 年から復元した。
* 赤実線は乙訓郡条里の里境、赤点線は坪境を示す。条里復元プランは、吉田敬市「山城乙訓郡の条里」『紀元二千六百年記念史學論文集』京都帝國大學文學部史學科編、京都帝國大學文學部史學科、1941 年から復元した。

図3 調査地周辺図(1:5,000)

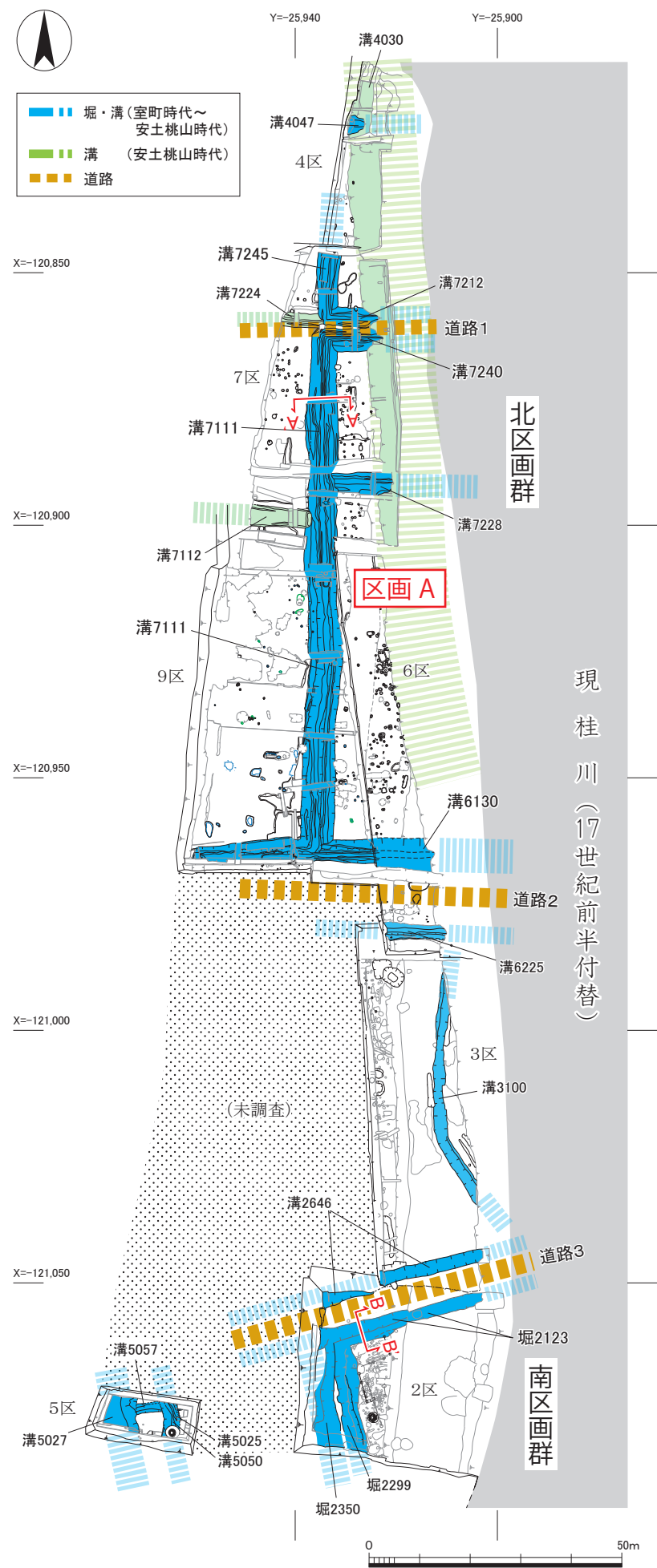


図4 室町時代から安土桃山時代 遺構平面図(1:1,200)

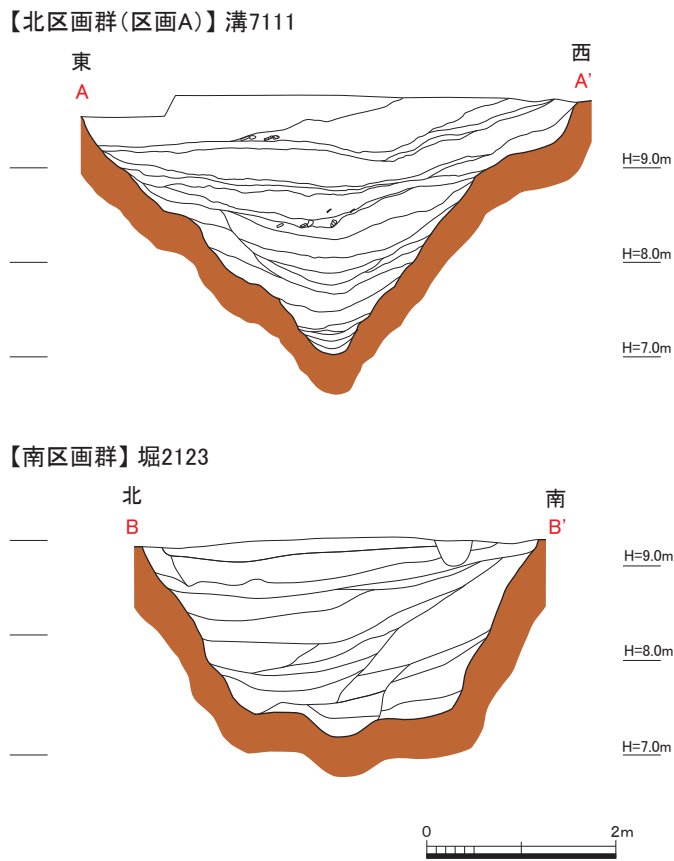


図5 堀の断面形状(1:80)



図6 溝7111(南から)

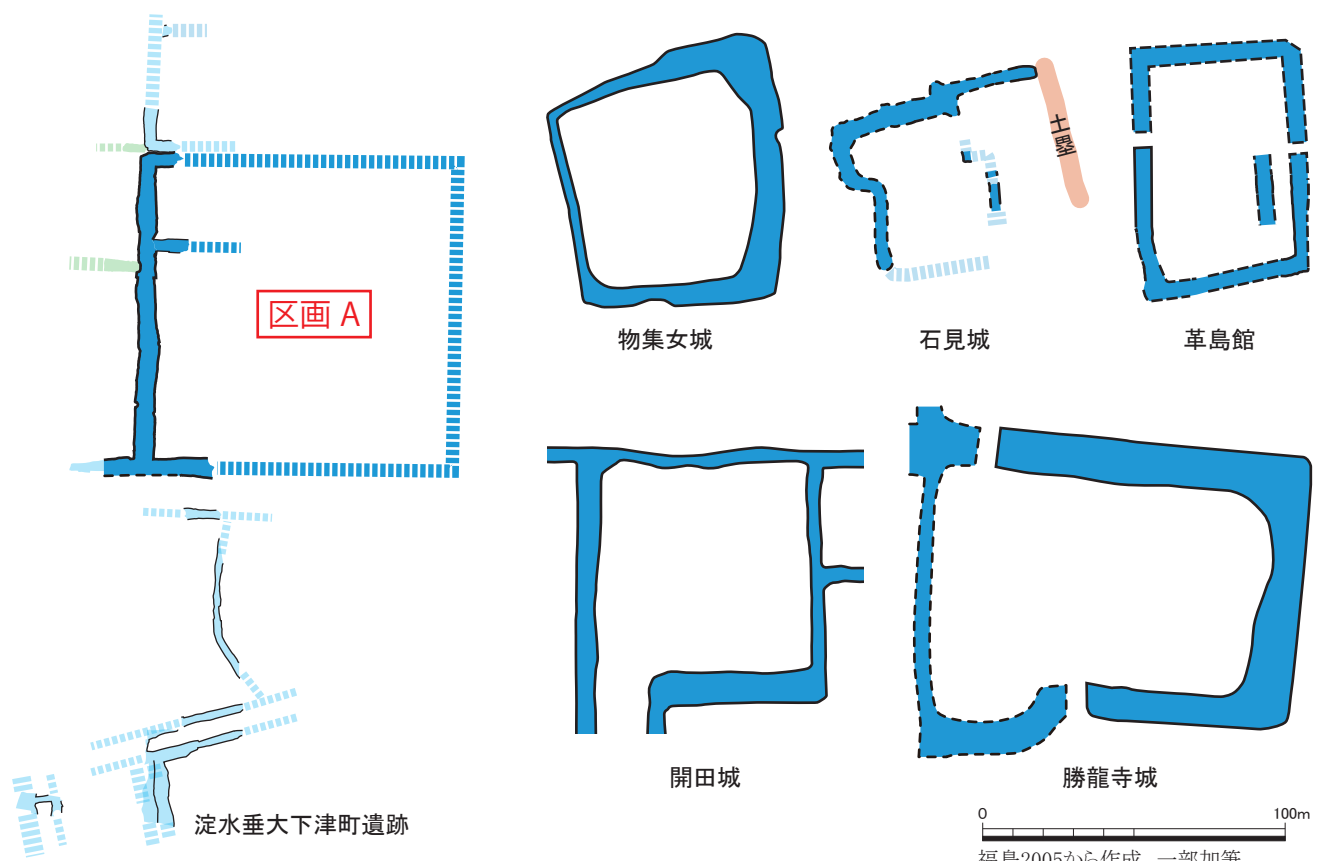


図7 乙訓・西岡の中世城館の堀・区画溝(1:2,500)

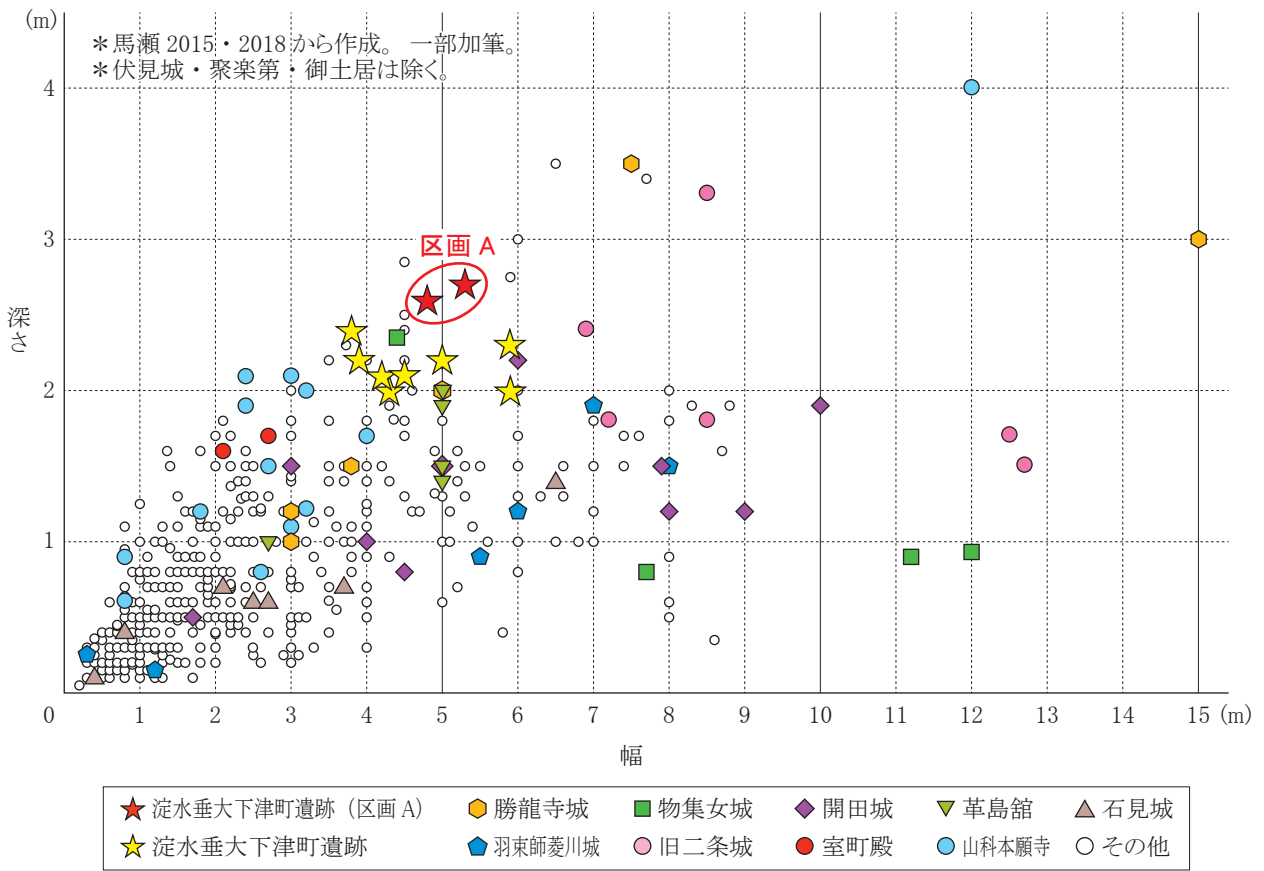


図8 京都市内や乙訓・西岡の堀(溝)の規模